

杉浦郁子、前川直哉著（青弓社、2022年）

## 「地方」と性的マイノリティ 東北6県のインタビューから

酒井 晃\*

2010年代以降日本において、性的マイノリティをめぐる活動がより活発化することによって、同性パートナーシップ制度の導入や企業・学校等の啓発活動へと繋がっていった。しかし、そうした動向は、東京などの大都市中心に語られがちで、「地方」の実情や活動に即しては、研究上あまり論じられてこなかった。本書の著者である杉浦郁子、前川直哉はセクシュアリティをめぐる歴史学的、社会学的な研究を数多く発表しており、これまで通説的な理解を大きく修正してきた。本書においても、性的マイノリティ団体の活動を正面から見据えることで、「地方」の閉鎖性や困難性といった通説的理解を越え、「地方」における市民活動の豊かさや可能性について、問題提起をおこなっている。

本書は359頁に及ぶ膨大なインタビュー集「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査報告書」（2021年2月、以下、報告書と略記）、すなわち、東北の性的マイノリティ団体に関わる20代から50代（当時）の23名を対象としたインタビュー調査に基づき分析をおこなっている。杉浦によると、2011年東日本大震災の際、性的マイノリティの避難ニーズを取りまとめた要望書を緊急災害対策本部へ提出する活動に参加したことをきっかけに、「地方」における活動の実情を探りたいという思いが募り、2018～2019年にかけてインタビュー調査をおこなったという。報告書にはHIV/AIDSをめぐる啓発活動、トランスジェンダーの医療・行政との折衝、東日本大震災、2010年代のコミュニティ活動や権利獲得をめぐる様々な展開など、1990年代からの東北の活動が決して周縁的な存在ではなく、活発な取り組みがなされていたことが仔細に記されている。評者は日本現代史のジェンダー／セクシュアリティに関心を寄せてきたが、同時代の出来事の記録と2010年代後半

のコロナ禍前の記憶を刻んだものとして、大変興味深い報告書であると感じた。

さて、本書は序章、第1部、第2部、コラム2本の構成となっている。序章では、杉浦、前川が共同で執筆し、報告書におけるインタビュー方法を提示し、本書の目的を記述している。第1部は前川が担当し、東北の性的マイノリティ団体の歴史（第1章）、「地元」で活動すること（第2章）、「LGBT」内部の差異（第3章）、東日本大震災（第4章）を取り上げている。第2部は、杉浦が担当し、メディアに出ることの意味（可視化）を問い（第5章）、「地元」での活動戦略（第6章）、青森での事例（第7章）、いわゆる「アライ」との協働（第8章）を記している。以下、各章の概要を述べる。

第1章では、1990年代から現在に至る東北での性的マイノリティ団体の活動記録がまとめられている。東北各地の性的マイノリティ団体を概観し、2010年代以前の状況があったからこそ、震災後のネットワークの広がりや深化があったことを確認できる章となっている。

第2章では、交流会や仲間づくりで障壁となる、アウトイングや「身バレ」について述べている。「身バレ」などを恐れて活動に支障が出る状況を「地方」特有の現象として見るのではなく、出身地（「地元」）と活動地域が離れていれば、不安を感じない場合もあると仮説を提示し、東北そのものが保守的で後進的な地域であるとする単純化した見方を批判する。

第3章では、「LGBT」内部の差異に着目している。ゲイ男性は移動の自由など男性ジェンダーとして振る舞うことが社会的に許容されているがゆえに、「地方」の活動ではなく、大都市部のイベント等へアクセスしてしまうこと、他方で医療や行政との折衝をせざるを得ないトランスジェンダーが活動を可視化させていることなど、内部の違い

\* 日本女子大学人間社会学部

をビビッドに伝えている。

第4章では、震災発生後の性的マイノリティの困難さについて、詳述している。カミングアウトの有無にかかわらず、避難所等を誰にとっても使いやすい空間にする必要性を説いている。一方で、性的マイノリティの困難さについて、東北外からの支援の動きが当事者のあいだで無用な混乱を引き起こし、「上から目線」の支援があったのではないかとする指摘は、今後起こり得る災害を自分ごととして考えるための提言として、絶えず頭に入れるべきことと感じた。

第5章では、カミングアウトについて取り上げている。運動目標として、カミングアウトをすることが進歩、肯定と捉えられることで、それが難しい「地方」を周縁化していると指摘し、地元でのメディア露出を抑えることや家族や親族への配慮を取る戦略を取り上げることで、クローゼット／カミングアウトの二分法を遡上にのせている。

第6章では、性的な差異以外は「ふつう」の人びとであるという戦略(リスペクタビリティ・ポリティクス)の有効性を論じている。「地方」にとって、性的マイノリティという存在は、性的マイノリティであるとともに、「東京的なもの」(190頁)として、二重に警戒されてきた。それを解きほぐすために「良き隣人」として、「地元」住民といかに対話可能となるのか、その回路に焦点を当てている。

第7章では、青森での実践を取り上げ、「地方」におけるパレード、コミュニティの運営について検討している。活動の蓄積やノウハウを活用しつつ、行政や地域住民と折衝していることが記述されている。

第8章では、ダイバーシティを単なるブランディング力の強化ではなく、地域に根差す運動と

して、組み替えていく作業が提示されている。ここでは交差性を重視し、「アライ」を巻き込みながら展開していく過程が描かれ、さまざまな社会問題に向き合う場として、性的マイノリティ団体が機能している側面を明らかにしている。

本書全体の意義は、性的マイノリティ団体の実践の意味を内在的に理解し、それを積極的に評価することで、中央／「地方」イメージの刷新を試みているところにある。東北6県の活動を踏まえ、「地方」像を単純化してきた大都市中心的な思考法へ一石を投じた、きわめて重要な著作として研究上位置づけることができる。

最後にやらないものねだりだが、疑問に思った点を簡単に述べたい。まず、東京の活動においても、地域住民と協働した運動や、カミングアウトをめぐる戦略など、本書で取り上げられている東北の運動と類似した点が多く見いだされる。大都市と一口にいっても、どこを切り取るかで、見え方は異なるように思われる。また、東北とひとくくりに語られているものの、単なる活動区域を指すものなのか、アイデンティティを表すものなのかについても、活動者に即して、もっと言及してほしかったが、このことは深く掘り下げるべき事柄が多くあることの証左であろう。本書はそうした研究の地平を前進させただけでなく、各地域の運動団体が盛り上がりを見せるなかで、「地元」で生き延びるためのヒントがちりばめられており、大変示唆に富む内容となっている。

## 注

- 1 以下のサイトで18名分のインタビューが公開されている。[https://www.reddy.e.u-tokyo.ac.jp/act/sexual\\_and\\_gender\\_minorities.html](https://www.reddy.e.u-tokyo.ac.jp/act/sexual_and_gender_minorities.html)